

新カリキュラムにおける 「地域・在宅看護論」のねらいと本書について ～山田雅子先生に聞く～



本書の著者であり、看護基礎教育検討会構成員の聖路加国際大学大学院教授・山田雅子先生にお話をうかがいました。

●「暮らしを支える看護師」を育てる

——今回『系統看護学講座 地域・在宅看護論』の刊行にあたり、先生には企画段階からご尽力をいただき、まさにゼロからのテキストづくりをしていただきました。改めまして、新しい教科として誕生した「地域・在宅看護論」を学ぶための本書の方針について、お聞かせください。

山田：新カリキュラムにおいて「在宅看護論」が「地域・在宅看護論」になったことで、在宅で療養している人を対象とした看護だけでなく、地域に暮らすすべての人を対象とした看護について学ぶことが明確になりました。いま、時代のニーズを背景に、社会から「暮らしを支える看護師」を育てることが求められていると感じています。病院や診療所だけでなく、暮らしの保健室などで活躍する看護師もいますし、地域のさまざまな場で看護が必要とされています。共著者の先生方とのご相談によって、暮らす場所も、ライフステージも、健康レベルもさまざまな、あらゆる「暮らす人々」を支える看護について学ぶことに軸をおいたテキストになったと思います。

——「在宅看護論」は統合科目におかれていましたが、「地域・在宅看護論」は基礎看護学の次に位置づけられましたね。

山田：従来の、基礎看護学や成人看護学などをひと通り学び終わったあとに、統合科目として「在宅看護論」を学ぶという意識をかえて、低学年のうちから学んでいこうという意図があります。それに基づき、本書『地域・在宅看護論[1]』は、1年生から基礎看護学などと並行して学ぶことができるような内容にしました。基礎看護学と成人看護や老年・小児・母性・精神看護

学との橋渡しの役目も意識しています。『地域・在宅看護論[2]』は、従来の『在宅看護論』に近く、実践的な看護も多く学べる構成になっています。

● 暮らしを知ることは、相手を知ること

——今回『地域・在宅看護論[1]』『地域・在宅看護論[2]』のどちらにも序章が設けられました。看護学生の看子さんとその家族である斎田家の人々の暮らしが事例として紹介されています。

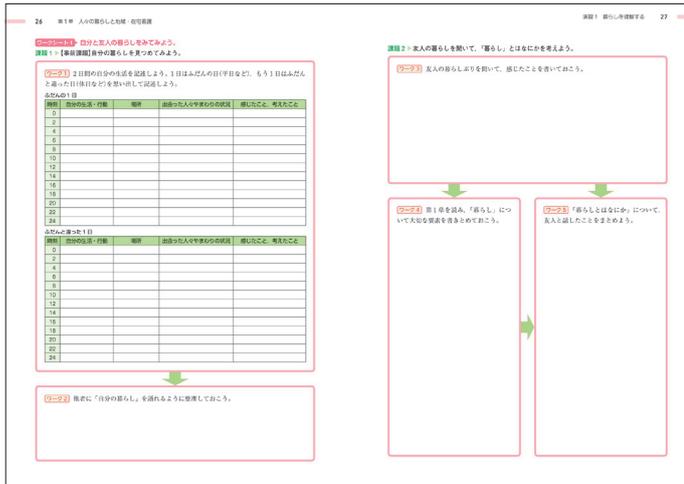
山田：事例は、「Aさん、X歳、既往歴〇〇」のようなデータを示すかたちではなく、ナラティブに、4世代にわたる家族の暮らしを紹介しました。看護師を目ざす人たちには、用語の定義や理論、理屈から入るのではなく(そういうことを学ぶことももちろん大切ではあるのですが)、「暮らしを営む目の前のその人を知る」という視点から、看護の世界を広げてほしいという思いがあります。まだ専門的な看護について学習していない段階でも、自分と同じ看護学生の看子さんの家族を通して、地域での暮らしや、暮らしと健康・医療・看護との接点を具体的にイメージしてもらえenと思います。看護を学びはじめる最初の時期から、看護は医療施設のなかだけで行われるものではなく、暮らしのあらゆる場に看護があることに気づいてほしいというねらいもあります。

——「暮らしを知ること」から地域・在宅看護にはっていくのですね。

山田：地域・在宅看護に限られたことではありませんが、相手のことを知ることこそが看護につながります。相手を知るには、その人の暮らし方を知ること、なにを大事に生きてきて、これからどうしたいと思っているのかを知ることが欠かせません。暮らしはその人の生きてきた歴史や価値観に基づいていますから、1人ひとり違って人々の数だけ暮らし方があります。暮らしを知って看護すると、真の自立支援につながるものがたくさんあります。

——看護学生の皆さんに、暮らしを知ることの大切さ、おもしろさを伝えるにはどうしたらよいのでしょうか。

山田：たとえば、『地域・在宅看護論[1]』の「演習1 暮らしを理解する」を使ってもらうのもよい方法だと思います。この演習は、まず自分の暮らしをふりかえって、友人の暮らしについて聞いてみて、つぎに身近な地域で暮らす高齢者の暮らしについて考えてみてというふうに、だんだんと視野が広がっていくワークシート形式の構造になっています。さまざまな暮らしがあることに気がつくと同時に、自分自身のことから学びにはっていくことで、看護を「自分ごと」として実感できると思います。



演習1 暮らしを理解するワークシートの一例

——自分自身を学習のスタートにするのですね。

山田：そうです。最近、「4年生になってはじめて自分自身のことも看護できるんだと気づいた」と言った学生がいました。いわゆる、セルフケアですね。もちろん1年生から基礎看護学などを通じて何度も学んできているのだけれど、4年生になってはじめて、実感として理解できた。なかなか自分のことには目が向きにくいのですが、自分自身を理解していなければ、相手のことを想像したり慮ったりすることはできません。自分自身を、相手を理解するときのイメージをふくらませるための教材として、学んでほしいと思います。

● 地域・在宅看護の醍醐味

山田：「こうあるべき」というかたちにあてはめるのではなく、その人の暮らしを理解して、その人の望む暮らし方を支える看護が、地域・在宅看護だと思います。たとえばごみ屋敷のような片付いていない家に暮らしていたとしても、片づけて清潔な環境にしてあげたいと一方的に焦るのではなく、その人の暮らし方をまず受け止めて、そのなかでより健康的な暮らしができるように看護をする。昔は、「シーツはしわ1つないように、10円玉が跳ねるくらいピンとはらなければいけない」と教わりましたが、それは看護師の価値観にそった看護です。その人の暮らしのなかで意味があるものでなければ、それは暮らしを支える看護ではないということです。『地域・在宅看護論[1]』『地域・在宅看護論[2]』の2冊を通して、こうした暮らす人を看護することに対する基本姿勢については、何度も繰り返しふれています。

——決まった型にはまった看護ではないということですね。

山田：人の暮らしは千差万別ですので、決まった項目をアセスメントして、アセスメントの内

容に合わせて決められた介入をして、というような看護にはならないですね。その人の「暮らしにくさ」に着目して、看護師だけでなくいろいろな職種と連携したり、利用できる社会資源を活用したりして、その人の望むような暮らしの環境を整えようと試行錯誤していくなかで、すばっとはまるようなよい看護ができることがあって、それこそが看護の醍醐味だと思います。

——実際の看護の場面では、相手の暮らしを理解するには、高度なコミュニケーション技術が必要なようにも思います。コミュニケーションが苦手な学生さんもいらっしゃいますよね。

山田：看護基礎教育検討会のなかでも、看護師のコミュニケーション力については大きな課題として話題にのぼりました。本書の改訂方針を検討するなかでも、コミュニケーション力をつけることの必要性については、ほかの先生方と意見が一致しました。一般的なコミュニケーションについては基礎看護学で学びますので、『地域・在宅看護論[2]』の第2章「暮らしを支える看護技術」のなかでは、看護師として暮らしの場にはいつていくときのコミュニケーションを中心に記載しています。

コミュニケーションは、まず相手を理解したいという気持ちがなければはじまらないと思うのです。この人はどんな人なのだろう、どんな暮らしをしているのだろうとイメージをふくらませれば、「お仕事はなにをされているんですか」「何時ごろ起きますか」「ふだん朝食は何時ごろ食べますか。その朝食は誰がつくるのですか」など、次々に質問が出てきますし、そこからかわり方を試行錯誤する手掛かりを得られます。それに気がつくことができれば、コミュニケーションの力もついていくのではないのでしょうか。

——地域には、子どもも高齢者も妊婦も、健康な人も、疾患や障害をもちながら暮らす人も、さまざまな人がいます。そのすべての人が対象だと考えると、地域・在宅看護ではすべての看護の共通基盤を学ぶということでしょうか。

山田：そうですね。成人看護・小児看護・母性看護・精神看護などのなかにも、地域・在宅看護の要素があると思います。とくに『地域・在宅看護論[2]』については、成人看護学や精神看護学など、ほかの科目担当の先生方にも、それぞれの授業のなかで使っていただけたらと思います。それぞれの科目で地域・在宅看護を意識した学習があたり前になれば、「地域・在宅看護論」は科目としては必要なくなってしまうかもしれませんね。

——ありがとうございました。